

『身捨つるほどの祖国はありや』

宮崎哲弥（著）／文芸春秋／1,762円＋税／1998年

私たちの自己決定とは

坂田三允（長野県看護大学）

一人の人にとって、祖国とはどのようなもの、あるいはどのような意味を持つのだろうか。私は自分が日本人であることにずっとこだわりを持ってきた。しかし、それは日本という抽象的な国家とは何ら関係のないものであった。私は「私とは誰か。私がどこからきて、どこへ行こうとしているのか」という問いのなかで、日本を見ていたにすぎない。もちろん、日本という国が嫌いだというわけではない。愛国心などというものからは程遠いにせよ、むしろ日本の風土や日本人らしさのようなものはとても気に入っている。ただ、私にとって日本という国家と祖国という概念が結びつかなかったのである。

そのような私にとって、この書の題はとても刺激的だった。著者は略歴によれば評論家である。時事論、大衆思想批判、政治哲学をメインフィールドとする、とある。政治のことなどは私にはよくわからないけれど、著者の守備範囲は広く、かつ、後書きに「何者かに迎合して節を折ったり、何事かを恐れて理を枉げるくらいなら、もの書きなどさっさと辞めた方がましだ」とあるように、切れ味鋭く、歯に衣着せない物言いはとにかく気持ちがいい。私には到底できないことだ。おそらくは「こんな啖阿が恰然と切れるくらいには、私は、我が世代は『育ちがいい』のであり、それこそが『坊ちゃん』の証しだというのなら、私は『坊ちゃん』と呼ばれても、少しも恥じることはない」とする著者の立つ位置の確かさゆえにできることなのであろう。といって頑固さや押し付けがましさは微塵も感じられない。ときに皮肉たっぷりな文章

で読む者をニヤツとさせるかと思えば、しみじみと読ませてくれる部分があり、あるいは問題をつきつけられて考え込まざるを得ない部分も多々あり、あきない。

たとえば、「自己決定権」という耳に快く響く言葉は、「生と死、あるいは脳死」「人工妊娠中絶」「安楽死」などとの関連で語られる。著者は自己決定権について「私達近代人は、人事ではいかんともしい難い運命に対する謙虚さ、敬虔さを失い（中略）代わりに近代人が得たのは、凡そ人というものは、己が運命のありかたを、自分の意志によって選択し決定する『権利』を先験的に持っているという、大それた観念だった」とする。そして、そのようなものが興隆している世相・思潮について「人間は、個として自己完結した存在ではなく、共同体のなかに生まれ落ち、他者との協関性のなかで死んでゆく存在」であり、「死の自己決定が一般化すれば、私達の死は、死にゆく個のみに内閉されてしまうだろう」と批判する。さらに、「人間というシステムは、（中略）息衝きであり、鼓動であり、体温であり、血色であり、発汗であり、放屁であり、排泄である。それを見守る家族や知己達であり、朋友である。それらが一致して人生の終わりを表象、認容しない限り『死亡』ならざる『死』は訪れてはいないのだ」という。

著者の主張する共同体とは、フェイス・トゥ・フェイスの交わりを温めあう場である。人と人とのつながり、わかりあえる人がそこにいること、そのような人びとのかかわりこそが、私たちの生に大切なのだとあらためて思った。▲



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。